

工石山

工石山は高知市土佐山と土佐町地蔵寺にまたがる双耳山峰であり、浦戸湾へそそぐ鏡川の源流高川川と吉野川支流である地蔵寺川の分水嶺となっている。南北のピークともに北西に恵まれ、北の頂からは石鎚山へ剣山系が、南の山頂からは高知市街を中心とする高知平野から太平洋が一望できる。自然休養林(日本第一号)であり樹齢200年に及ぶモミヅカナなどの天然林とスギ、ヒノキの人工林、シロモジなど広葉樹から成るシロガサ、ツツジ、リンドウ、ツバキなど四季に応じて花が咲く。また鳥類、昆虫、哺乳類やさいの河原のサンショウオなどが生息し、生物多様性の宝庫のようは存在である。

石鎚山へ旅へて、四国山脈へ望み、雄偉な大岩越へ東へ森が広がる。

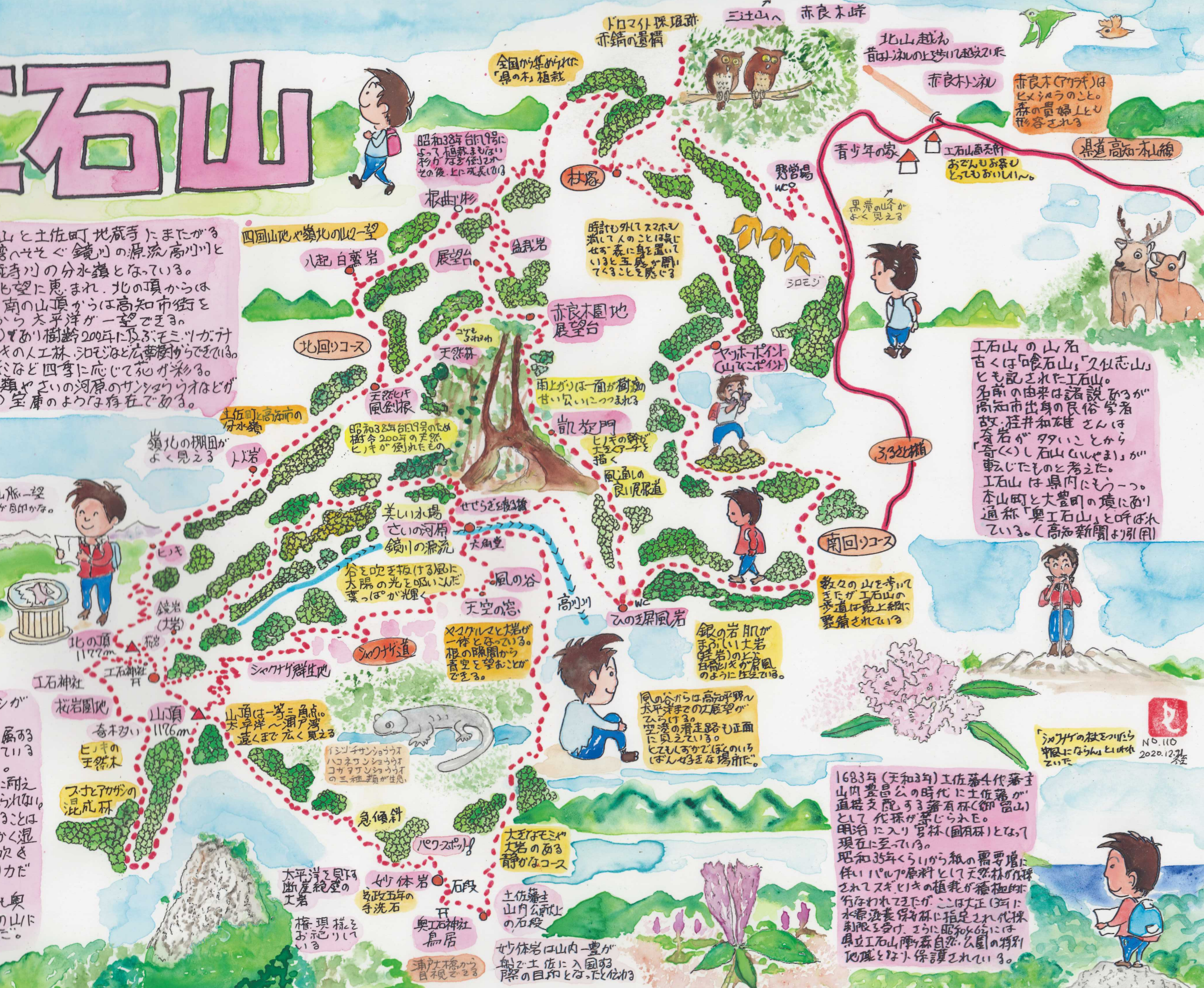
山頂周辺にはブナとアカガシが並んで生えている。冷温帯のブナと暖温帯に属するアカガシが同じ標高に生育している大変貴重な環境である。アカガシはある程度低温に耐えられるが、ブナは高温に耐えられぬ。この二つの樹種が混生していることは工石山が太平洋からの暖かく湿った風と四国山地から吹き降りる冷たく乾いた風のかたといわれている。土佐の山の気候はとて奥深く多様な自然がこの山に象徴されているように。

工石山の山名古くは「食石山」「久似志山」とも記された工石山。名前の由来は諸説あるが、高知市出身の民俗学者故・荻井和雄さんは「奇く(く)し石山(いしやま)」が転じたものと考えた。工石山は県内にもう一つ。本山町と大豊町の境にあり通称「奥工石山」と呼ばれている。(高知新聞より引用)

1683年(天和3年)土佐藩4代藩主山内豊昌公の時代に土佐藩が直接支配する藩有林(御留山)として代採が禁じられた。明治に入り官林(国有林)となり現在に至っている。昭和35年くらいから紙の需要増に伴いパルプ原料として天然林が伐採されてスギヒノキの植栽が積極的に行われてきたが、これは正しく水資源保護を指し示す代採制限を受け、さらに昭和66年には県立工石山摩訶不思議自然公園の特別地域となり保護されている。

「シロガサの枝を折る」中風にならん」といわれていた

NO.110
2020.12.21



昭和38年台風9号によって倒れた杉が、その後、上に成長している

全国から集められた「鼻の木」植栽

ドロマ外探路跡 赤錆の遺構

三辻山へ 赤良木峠

北山越え 昔は、山の北を歩いて越えていた

赤良木峠

赤良木(アカキ)は ヒメシロウのこと。 森の貴婦人として 形容される

県道高知本線

青少年の家

工石山展望所 おでんやお茶して頂いてほしい

黒竜の山がよく見える

時計の針はスズホシ 流れて人の心は止まる 森に身を置いて いると五臓が震えてくることを感じる

シロモジ

ヤブポイ(山びこ)

赤良木園地 展望台

雨上がり一面が樹の緑 甘い匂いにつつまれる

凱旋門 ヒノキの幹が まるで大砲を描く

風通しの良い原道

南回りコース

数々の山を歩いたが 工石山の歩道は最も細く 整備されている

銀の岩肌が まるでいい大岩 (岩)の上を 白雲が流れるように見える

風の谷からは高知平野の 太平洋までの大展望が 広がる。 空澄の滑走路も正面 に見えている。 北へ向かうほど、のびのびとした場所だ。

マツクマヒと岩が 一体となっている。 根の隙間から 青空を望むことが できる。

風の谷 天空の窓

せせらぎの滝 大角堂

美しい水場 さいの河原 鏡川の源流

谷を吹抜ける風に 太陽の光を吸い込んで 葉っぱが光る

シロガサ道

山頂 1176m

北の頂 1177m

工石神社

山麓 同定盤

ヒノキ

土佐町と高知市の 分水嶺

山麓の棚田がよく見える

北回りコース

八起白雲岩

展望台

根曲り杉

四国山地や嶺北の山々一望

根曲り杉

根曲り杉

根曲り杉